

2015年度 北海道大学 前期 国語

一 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	35分	中村桂子『科学者が人間であること』からの出題。中村桂子は日本の生命誌研究者。理学博士（東京大学）。生命の歴史物語を読みとることを意味する「生命誌」を提唱し、その理念を実現する「J-T生命誌研究館」を設立した。著書に『ゲノムに書いていないこと』、『いのち愛づる生命誌（バイオヒストリー）』—38億年から学ぶ新しい知の探求』などがある。また、筆者が依拠していた大森荘蔵は日本の哲学者。二元論を否定し独自の一元論を打ち立て、のちの哲学者に多大な影響を与えた。著作に、リード文で示された『知の構築とその呪縛』のほか、『物と心』などがある。	「人間が自然をどう見るか」について、哲学者・大森の考え方にのっとりながら述べられた文章である。文章の長さは標準的で、キーワードの説明や筆者の主張が平易な言葉づかいで具体的に書かれており、理解しやすい内容であった。設問の難易度もやや易く標準で、本文を丁寧に読んでいけば比較的容易に解答要素を見つけられることができ、制限

時間内に自分の納得がいく解答を完成させられた人が多いのではないだろうか。

傾向と対策

設問ごとに見ていくと、問一の漢字の書き取りは例年通り七問の出題で、難易度も標準的なものであった。問二は傍線部が指示するものが明らかで、満点が狙える問題であった。問三はハーベイの実験内容を説明する問題であったが、傍線部を確認し「密画化」の意味をきちんと踏まえた解答を書くことが重要であった。問四は「科学」と「日常」の相違を述べればよかったものの、書くべき内容の選択に少し時間を要しただろう。問五では「本文全体の趣旨をふまえて」という指示にとらわれて傍線部の説明が半端にならないよう、最初に傍線部についての説明を確定させることが必要であった。

例年、北海道大学の現代文では、30～50字という少ない文字数で本文の記述をまとめさせる設問が出題されている。制限字数が少ない問題では、本文の言葉をそのまま抜き出して用いると制限字数を超えてしまったり、解答に必要な他の要素が抜けてしまったりする。今回の問二、問三のように解答要素が見つけやすい問題では、いかに本文の言葉を簡潔な日本語に言い換え、要素を過不足なくまとめられるかで点数に差がつく。そうした力は一朝一夕に身につくものではなく、継続的に現代文の問題に取り組み、解答を根気強く推敲する作業を繰り返す中で徐々に培われるものである。過去問や問題集を使って積極的に解答づくりの訓練をしよう。

解答

問一 1 還元 2 随伴 3 適(的)確 4 発祥 5 軌道

6 刺激 7 匂(臭)

問二 自分の五感を通じ外界と接する時の「略画的」な世界像の描き方。

(30字)

問三 血管の系統が一つであり、血液が人体の内部で機械的に循環している

ことを詳細な実験によって証明した。(48字)

問四 科学では、日常の感覚から離れ対象を細部まで客観的に分析することが科学化という言葉で正当化されるから。(50字)

問五 近代以降の科学が、分析的にもものを見る過程で二元論に拠って立ち、

人間の持つ感覚的性質を主観的として排除し、形や運動を客観的として追求したため、自然を機械的なものとして見るようになってしまっ

たということ。(100字)

本文解説

段落解説

I 「略画的」な見方と「密画的」な見方(第1～5段落)

まず、筆者は「人間が自然をどう見るか」ということを論じるにあたって、

『「略画的」な見方』と『「密画的」な見方』という大森荘威の考え方のキーワードを紹介する。日常で私たちが五感を通じて外界と接するときを描く世界像を、大森は「略画的」と呼ぶ。反対に、近代科学の誕生によって可能になった、詳細まで分析的にもものを見ていく見方を「密画的」と呼んでいる。

大森の考え方は、「密画を描」き、「世界を密画化していく」、つまり世界を細かく分析的に見ていくのが科学であるという。例えば望遠鏡や顕微鏡を

利用して対象を細部まで見ることは、密画を描くことである。こうした「密画化」の過程では必ず数量化が行われるため、私たちは科学の性質は数量化にあると思ってしまうがちである。しかし、大森曰く、数量化はあくまで密画化に不可欠な方法にすぎず、科学の本質は密画化そのものにあるのである。筆者もそのことが重要であるという。

II 「密画的世界」追及の問題点と「密画化・死物化」の意味(第6～第11

段落)

近代以降、人間の世界観は略画的世界から密画的世界へと変化してきた。

密画的な見方は科学というかたちで人間社会に入り込んでゆき、今では「密画的な見方こそ進歩を支える源」である、つまり対象を細部まで分析的に見るという方法が人間の発展に大きく寄与するのだ、という考えを信じる社会になっている。しかし、こうした密画的世界のみを追求する現代の社会はどう見ても問題があると考えている人も多い。筆者は、密画的世界の追求は人間として自然な行いであるとしながらも、現代の科学技術社会の「どこに問題があるのかをきちんと捉え、直していかなければならない」といい、その問題とは二つあると述べる。一つは大森が指摘する「密画化によるすべてのものの死物化」であり、もう一つは密画化のみが進んだ正しい見方であるとして「日常的な見方を否定すること」である。

ここで「密画化・死物化」がどういうことであるかとその意味を大森に従って考えていく。「密画化」の始まりは天文学に見られる。天文学ができてから長い間、惑星は円運動をしているとされてきたが、観測データを用いたケプラーの研究によって楕円運動とその規則性が示された。また、ガリレイが望遠鏡を用いて次々に新しい発見を成し遂げ、そこでは数値が大きな力を発揮していた。詳しく分析的に見るという行為が天文学の発展に貢献するよ

うになったのである。それと同じ頃、人体に関しても、ハーベイがガレノスの人体地図を密画化した。ガレノスは「血液は常に肝臓で作られ送り出されている」としていたが、ハーベイは「血管の系統は一つしかなく、しかも血液は循環している」という自身の考えを実験によって証明した。大森は、ハーベイの研究が明らかにしたのは「血液という物質の運動」であって、そこでは『生命』が消えている」と指摘している。デカルトなどの当時の知識者が血液循環説を動物機械論の根拠にしたことが示すとおり、血液循環説の登場によって、人間は「生命」があるはずの動物を「機械」のように見なし始めたのである。

Ⅲ 日常のスケールでないと進みやすい科学(第12〜第16段落)

ここで筆者は、密画化が進んだのが遠い天体や体の中といった世界であることに注目したいという。「直接触ることのできない世界、日常のスケールから見るととても大きくったり小さかったりする世界」が細密化、科学化に向いているらしいのだ。科学の急速な発展に伴い、分析対象はどんどん小さな世界に入っていた。物理学では、原子を超えて今ではクォーク・ニュートリノと、「日常とはかけ離れた小さな世界が対象になってい」る。しかも、そうした研究の成果によって、直接感覚で触れることのない、日常のスケールから見るととても巨大な宇宙の年齢や起源までもが物理学的な分析と観察から実証されつつあるのだ。

このように「科学が日常のスケールでないと進みやすく、日常は語りにくい」ということに私たちは注意を向けてよいのではないかと筆者は言う。科学の過程、すなわち細密化においては日常の感覚とは別の次元で分析が進められ、そうした営みは「科学化という言葉で正当化されることによって、急速に進んでいく」のである。そして、ここでの科学はガリレイとデカル

ルトの考え方に縛られている。「細密描写は世界の客観的描写であり、形と位置とその時間的変動、つまり幾何学と運動学で語られるものである」とし、人間の感覚のような主観的なものは細密描写の対象から外される。世界の客観的描写こそが科学とされているのである。ここでは明確な主客二元論が用いられている。近代以降の科学は明らかに二元論に立っており、近代科学の思想を示したデカルトは、形や運動を客観に、色や音などの感覚的性質を主観の例に分け、科学は客観を追求すべきだとしてきた。

大森は、科学が主観を切り離し客観のみを追求するようになったことこそが「死物化」だと言っている。デカルトに従うと、理性で到達できないものは語ってはならず、大森の言う「死物」で自然を説明することが科学的であるということになってしまう。第11段落で述べられた動物機械論のように、生命あるものを「形や運動」で説明し、無機質的なものとして扱うことが科学的ということである。これを「死物」と表現するところに、大森と筆者の近代科学に対する批判が読みとれるだろう。本文の題名にあるように、「科学者が人間である」のだから、自然を日常から切り離して「死物」で説明するようなことは賢明でないと主張しているのである。

百字要旨

現在の社会では、詳細まで分析的なものを見る密画化が重視され、客観のみを追求する近代以降の科学が日常から離れた次元で急速に進んだため、すべてのものが「死物化」し、日常的なものの見方の否定が起こっている。

(100字)

用語解説

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店) (ただし、※のついた語義は解説執筆者による)

数量化 いろいろな情報を数や量に変換して表すこと。

二元論 ある対象の考察にあたって二つの根本的な原理または要素を持つて説明する考え方。

①宇宙の構成要素を精神と物質との二実体とする考え方。デカルトの物心二元論は代表的な例。

②世界を善悪二つの原理(神)の闘争と見る宗教。ゾロアスター教・マニ教など。

設問解説

問一

解答 1 還元 2 随伴 3 適(的)確 4 発祥 5 軌道

6 刺激 7 匂(臭)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

完全を旨指したい設問である。2の「随伴」の書き取りに少々たじろいだかもしれないが、「数量化は密画化に不可欠ではあるが、科学の本質は密画化そのものである」という第5段落の文脈を考えれば「ズイハン物」が何かに伴うもの、というイメージがおのずと湧くだろう。3は「適確」「的確」のいずれも「間違いがない」という意味を持つためどちらでもよい。同音異義語の「適格」と混同しないよう気をつけよう。4の「発祥」のように、耳慣れた言葉であっても書いてみると意外と難しい、ということもあるので油断は禁物。7の「匂(臭)」に関しては、一般に「匂い」がいい香り、「臭い」が悪い香りを指すが、ここでは文脈上どちらでも許容される。

漢字問題の数が合格を左右することも十分あり得るため、漢字に自信がない人は、ぜひとも漢字の勉強をしてほしい。

問二

解答 自分の五感を通じ外界と接する時の「略画的」な世界像の描き方。

(30字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型+指示語説明型

解答範囲 I (第1〜第5段落、特に第2・第3段落)

解説

まず、傍線部の「それ」という指示語が表す内容を確認しよう。傍線部は「それに対して」という対比を示す記述に含まれているため、傍線部の前後で相反する二つの内容が述べられているはずである。「それに対して」の直後に密画的な見方についての説明がなされていることを確認できれば、「それ」とは「密画的」な見方」に対応する言葉、つまり「略画的」な見方」であることがわかる。このように、指示語の表す内容を説明する問題では、指示語に対応する名詞を本文の中から見つけるとよい。第2段落を参照して「略画的」な見方」に説明を加えよう。具体例は原則として解答に含める必要がないことを踏まえると、解答として含めるべき箇所は第2段落1文目の「日常、自分の眼で物を見、耳で音を聞き、手で触れ、舌で味わう」という形で外界と接している時に私たちが描く世界像」のみである。このまま抜き出すと30字に収まらないので、本文の言葉を適宜自分の言葉に置き換えよう。解答では「自分の眼で物を見、耳で音を聞き、手で触れ、舌で味わう」という形で「五感を通じ」とした。

以上より、解答は「自分の五感を通じ外界と接する時の「略画的」な世界

像の描き方。」となる。

《解答要素》

- ① 「自分の五感を通じて外界と接する時の」
- ② 「『略画的』な世界像の描き方」

《参照箇所》

- ① 第2段落1文目
- ② 第2段落1文目、第3段落1文目

問三

解答 血管の系統が一つであり、血液が人体の内部で機械的に循環している

ことを詳細な実験によって証明した。(48字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 II (第6、第11段落、特に第10・第11段落)

解説

傍線部の「ハーベイが行った密画化」とは、具体的にいうと第10段落で説明されている、ハーベイの実験のことである。「密画化」とは、ものを詳細まで分析的に見る見方である、という第3段落の内容を理解していれば、人体の内部にある血液を観察したハーベイの実験が「密画化」にあたりと判断できるだろう。よって、ここでは血液循環説の実験について書かれている第10・11段落の内容をまとめればよい。ハーベイの実験の対象と内容、結果を解答に含めよう。第10段落1文目に「同じ頃人体についてもハーベイが、それまで教科書とされてきたガレノスの人体地図を密画化した」とあるように、ハーベイの密画化は「人体の内部」について行われたものであるか

ら、まずそれらを実験の対象として解答に含める。次に、ハーベイが「人体の内部」に何を確認したかについて考える。「血管の系統は一つしかなく、しかも血液は循環している(第10段落3文目)」と考えたハーベイは、それを確かめるために実験をくり返し、血液循環説を証明したのである。したがって、「実験によって血管の系統が一つであり、血液が循環していることを確認」を内容、「血液循環説を証明」を結果として解答に含める。

続く第11段落1文目で大森が「ハーベイが細密化、整合化したのは血液という物質の運動であり、そこでは『生命』が消えている」と指摘していることが述べられている。また、傍線部前後の文脈を考えると、第7、第11段落を通じて「密画化・死物化とはどういうことか、それはどんな意味を持つのか」の説明がなされている。これらも踏まえ、「ハーベイの密画化」の説明に「死物化」の要素も加える必要があると気づかなければならない。しかし、「『生命』が消えている」という言葉は抽象的すぎるため、言い換える必要がある。傍線部周辺を再度確認してみると、第11段落2文目で「デカルトをはじめとする当時の識者は、この血液循環説を動物が機械のように動いていることの証拠とした」とある。機械とは、生命を宿さない無機質的なものであるから、「『生命』が消えている」ことは「機械的に」というふう言い換えて用いられる。解答ではこれを「血液が循環していること」につなげて、「血液が機械的に循環していること」と表現した。

以上より、解答は「血管の系統が一つであり、血液が人体の内部で機械的に循環していることを詳細な実験によって証明した。」となる。

なお、第11段落1文目の言葉を用いて「人体の内部で血液が循環していることを細密化、整合化した。」とした人もいるかもしれない。「細密化、整合化」というのは、ものを詳細に見るプロセスを表した言葉であるが、この設問では「密画化」という抽象的な言葉を具体的に説明する必要があるため、

「実験によって証明した」というところまで解答に含めるべきである。したがって、「細密化、整合化した。」だけでは不十分といえる。

《解答要素》

- ① 「人体の内部で」
- ② 「血管の系統は一つ」「血液は循環している」というハーベイが証明した血液循環説の内容

- ③ 「(②を) 詳細な実験によって証明したこと」

- ④ 「(血液の循環が) 機械的であること」

※解答は「〜証明したこと。」で結ぶこと。

《参照箇所》

- ① 第10段落1文目
- ② 第10段落3文目
- ③ 第10段落4文目
- ④ 第11段落1・2文目

問四

解答 科学では、日常の感覚から離れ対象を細部まで客観的に分析すること

が科学化という言葉で正当化されるから。(50字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅲ(第12〜第16段落、特に第14段落)

解説

科学が日常のスケールでないとところで進みやすいのはどうしてなのか、と問われている。科学を日常の感覚から遠ざける要因を本文から探し出そう。

傍線部直後の文をみると、「こうした細密化においては、日常の感覚とは別の次元で分析が進められ、それが科学化という言葉で正当化されること」によって急速に進んでいくのです(第14段落2文目)とある。この文から、日常でないスケールで行われる細密化が「急速に進んでいく」理由は「科学化という言葉で正当化される」ためだとわかる。さらに詳しくみてみよう。「こうした細密化」とは第3〜5段落を中心に説明されているように、対象を細部まで分析することであり、近代以降の科学の進歩は細密化によって支えられているとされている。

また、ここでの科学は「ガリレイとデカルトの考え方に縛られて(第14段落3文目)」おり、色や音などの主観は細密描写の対象から外され、主観を排除したものが科学とされるのだという。つまり、日常の感覚から離れて対象を分析することが「正当な科学」とされるがゆえに、科学が行われる世界はどんどん日常から遠ざかってしまう。それは裏を返せば「科学が日常のスケールでないとところで進みやすく」なってしまふ、ということになるのである。

以上より、解答は「科学では、日常の感覚から離れて対象を細部まで客観的に分析することが科学化という言葉で正当化されるから。」となる。

ところで、傍線部以前の文章を参照して「日常のスケールから見るととても大きくったり小さかったりする世界が細密化、科学化には向いていないから。」というような解答をつくった人はいないだろうか。傍線部の理由説明を求められた際に、最も気をつけてほしいのは解答が傍線部の反復にならないようにすることである。「AはなぜBか」という問に対して内容は同じで表現を変えただけの「Aは、Bだから」のような答えはふさわしくない。

「CであるからAはBである」という論理構造をきちんと作ったうえで、解答にCに相当する内容を書くことができているか、自分の解答をいま一度確

認してほしい。当たり前のようで実はできていないことが多いところである。「日常のスケールから見るととても大きくったり小さかったりする世界が細密化、科学化には向いているから」という解答は、表現は違ってもおおよそ傍線部と同じ意味を表しており、設問が要求している傍線部の理由説明としての役割を果たしていない。もし「向いているから」という文末にするのであれば、なぜ日常から離れた世界が科学化に向いているのかということまで解答に含める必要があり、結果として「日常から離れた細密化が科学化という言葉で正当とされる」という要素は選り取りなければならぬ。解答を書き終えたあと、その解答が設問の要求にきちんと応えたものになっているか常に確認するようにしよう。

《解答要素》

- ① 「科学で行われる細密化」
- ② 「①は」 日常の感覚から離れ、詳細まで分析的にもものを見ていくことである
- ③ 「②は」 科学化という言葉で正当化される

※解答は「〜から」「あるいは」「〜ため。」と締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第14段落1・2文目
- ② 第3段落2・3文目
- ③ 第14段落2文目

問五

解答 近代以降の科学が、分析的にもものを見る過程で二元論に拠って立ち、

人間の持つ感覚的性質を主観的として排除し、形や運動を客観的とし

て追求したため、自然を機械的なものとして見るようになってしまったということ。(100字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型十要旨把握型

解答範囲 本文全体

解説

『死物化』の意味を、本文全体の趣旨をふまえて「説明せよ」とあるとおり、問五では本文全体が何を言っているかを把握したうえで解答を書くことが求められている。しかし、初めから「本文全体の趣旨」を解答に含めることに注力する必要はない。まずは傍線部が引いてある「死物化」の意味を簡潔にまとめ、それから本文の俯瞰に移っていく。傍線部が含まれる第16段落1文目で「そして大森は、これこそが『死物化』だと言っているのです。」とある。「これ」が指す内容を確認するためにその前の段落の内容を確認する。すると、「これ」とは、二元論に拠って立つ近代科学が「客観」を追求すべきだとしてきたことであるとわかる。では、「客観」の追求が「死物化」という否定的な表現でくくられているのはなぜか。第7段落で「死物化」が現在の科学技術社会の問題点として挙げられていることに留意しつつ考えよう。

近代以降、人間の世界観が略画的な見方から密画的な見方へと変化する中で、大森が指摘するように、「死物で自然を説明することが科学的である」ということ(第16段落2文目)になってしまった。「形と位置とその時間的変動、つまり幾何学と運動学で語られない色や音などの感覚的性質を科学は扱わない、扱うべきでない」という考え方に縛られており、本来人間が持っている日常的な感覚は科学から排除されてしまったのである。第10・第11段落で述べられたハーベイの実験では、血液という「物質の運動」を細密化し、

それは動物が「機械のように動いていること」の証拠とされた。しかし、動物は本当に機械のような存在であるのだろうか。私たちが暮らしている世界は科学の世界ではなく日常の世界であり、そこで五感を使って彼らに接するとき、つまり動く姿を見、鳴き声を聞き、その肌に触れたとき、私たちはその体に「生命」を感じるのではないだろうか。日常から離れた科学の世界で客観のみを追求した結果、本来生命があるものから『生命』が消えることになる。これを大森は「死物化」と表現したのである。ここまでで「死物化」の説明に、「近代以降の科学が二元論に拠って立ち客観を追求した」「主観を細密描写の対象から外した」という二つの要素を組み込まなければならぬことがわかるだろう。

また、この文章は「大森の言う死物で自然を説明することが科学的であるということになる(第16段落2文目)」で終わっていることから、「密画的見方が志向されるようになった結果、自然でさえ死物で説明されるようになった」ことを提起しようとした文章だとわかる。これも解答に含めよう。「死物」は傍線部で説明が求められている言葉であるため、「死物で自然を説明する」はそのまま使うことができず言い換えが必要である。「死物」とは生命がないものであることから、第11段落の「機械」「物質」といった言葉を用いるとよい。

以上より、解答は「近代以降の科学が、分析的にもものを見る過程で二元論に拠って立ち、人間の持つ感覚的性質を主観的として排除し、形や運動を客観的として追求したため、自然を機械的なものとして見るようになってしまった」ということとなる。

なお、傍線部の「死物化」は決して前向きな意味で用いられている言葉ではないので、それに対応して解答も批判的ニュアンスを含めたものができるとうい。その意味で「自然を〜見るようになった」ではなく、「自然を〜見

るようになってしまった」という結び方を用いた。

《解答要素》

- ① 「近代以降の科学は二元論に拠って立ってきた」
- ② 「形や運動を客観的として追及した」
- ③ 「感覚的性質を主観的として排除した」
- ④ 「(②③の結果) 自然を物質的・機械的なものとして見るようになってしまった」

《参照箇所》

- ① 第15段落1・2文目
- ② 第14段落4文目、第15段落3・4文目
- ③ 第14段落4文目、第15段落3文目
- ④ 第16段落2文目、第1段落1文目、第11段落1・3文目

(森岡桃子、井小路馨、田村進也)

2015年度 北海道大学 前期 国語

二 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	40分	外岡秀俊『三度目の情報革命と本』からの出題。外岡は元朝日新聞社のジャーナリストで、小説家としても活動している。	問二は抜き出しの問題であるから確実に正解するようにしたい。その他の問題について、題意をくむことは比較的容易であるものの、字数制限内でうまく解答することが難しい問題が多かった。振るわなかった人は表現力を鍛えるための練習が必要であろう。

解答

- 問一 本の在り方を制限していた、装幀や挿絵と不可分であったがゆえの芸術品としての側面。(40字)
- 問二 黙読する新興知識階級と、文字を読めない大衆との分裂(25字)
- 問三 機械的で精巧な複製の実現により、芸術の一回性に基づく神聖さが弱まったということ。(40字)
- 問四 書籍が電子化し物質性を失うことで、本が伝えるひとまとまりの知識

がネット上の膨大な情報群の断片的要素となり、書籍の流通・利用に関する物理的制約が大幅に除かれる点。(80字)

- 問五 電子書籍が普及した場合、今まで本の物質性に依拠して維持されていた文化装置と同等のものを実現し、従来通りの人間の知の在り方を守ることが難しいのではないかとこの点。(80字)

本文解説

段落解説

I 「情報革命」をどう捉えるか(第1〜第3段落)

書籍のデジタル化が進行する中、電子書籍と対置する形で、紙の本の行く末が盛んに論じられている。しかしまずは、書籍のデジタル化がもたらす得失の両方を見極め、その本質を明らかにすることが先決である。

II 活版印刷による革命(第4・第5段落)

活版印刷の技術は、書物がそれまでもっていた「芸術品」としての価値から書物を切り離れた。書物の市民への解放は、宗教改革や国民言語の形成を促進した一方で、検閲という制度を生むなど、さまざまな質の社会的変化を生じさせた。

III 「アナログ革命」(第6〜第8段落)

約百年前の「アナログ革命」では、複製技術の発達によって芸術作品の一回性が衰退し、礼拝価値に代わって展示価値が重要視されるようになった。

IV 「デジタル革命」(第9～第12段落)

デジタル化は、本を物質性から解放し、情報利用の利便性を大きく向上させる。また、個人による出版・流通も容易に可能となる。しかしその一方で、それまで物質性に依存する形で築いてきた、高品質の商品を提供し続ける仕組みの存続が危ぶまれる事態ともなる。

百字要旨

情報革命の評価には、得失の両面を十分な議論の上で見極めることが肝要だ。デジタル革命は利用に際する物理的な制約から本を解放し利便性を向上させる一方で、既存の仕組みが維持してきた出版の質を低下させうる。

(100字)

用語解説

―出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店) (ただし、※のついた語義は解説執筆者による)

くびき ①車の轆の端につけて、牛馬の後頭にかける横木。

②(比喩的に)自由を束縛するもの。

装置 ※ある機能を持った一連の機構。具体物以外にも用いることに注意。

問一

設問解説

解答 本の在り方を制限していた、装幀や挿絵と不可分であったがゆえの芸術品としての側面。(40字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 具体化型

解答範囲 第4段落

解説

比喩的表現の具体的説明を求める問題である。まず、「くびき」という語の意味を知っているかという点が問題となる。用語解説でふれたとおり、「自由を束縛するもの」といった意味の語であるが、聞きなじみのない人も多かったのではないかと思う。直接この語の意味を知らなかった場合は、傍線部直後の「くからの解放」という表現との関係から、「くびき」がどうやら何らかの自由を束縛しているらしいなと推測するほかない。本問はこの方針でも十分に解答できると思われるが、入試本番で知らない語句を推測して解答するのは精神的な負荷が大きいだろうから、不安を感じる人はこれを機に語彙の勉強をして備えるのもよいだろう。

さて、まずは「くびき(自由を束縛するもの)」に注目して傍線部とその前後を分析しよう。「何が何の自由を束縛していたのか」を理解することが目標だ。第4段落1文目に、「活版印刷が、く書物を、くくびきから解き放つた」とあるから、自由を束縛されていたのが書物であることがわかる。また、「くびきから解き放つた」は活版印刷の前後の変化を指す表現であることもわかる。直後の第4段落2文目を見ると、「解放」以前は書物が「芸術品」とみなされていたということがわかるので、「書物が芸術品としてみなされていたこと」が「書物」の自由を束縛していた、という内容を読み取れる。なぜ書物が芸術品とみなされていたのかについてもふれておこう。第4段落2文目によると、「それまでの写本は、豪華な装幀や細密画などの挿絵と切り離せ」なかったことが、「芸術のくびき」、すなわち書物が芸術品としてみなされていたことの原因であったようだ。活版印刷の登場によって、装幀や挿絵といった要素は書物に必須のものではなくなり、このことはすなわち「芸術のくびき」からの解放を意味している。

以上が傍線部に関係する論理関係である。これを「芸術のくびき」と等置できる形に40字でまとめると、次のようになるので、これを解答とする。「本の在り方を制限していた、装幀や挿絵と不可分であったがゆえの芸術品としての側面。(40字)」

《解答要素》

- ① 「書物が芸術品としてみなされていたこと」を意味する体言で終わっていること。
- ② ①が書物の在り方を制限していたことについてふれていること。
- ③ ①の理由として、書物が装幀や挿絵といった装飾と一体のものであったことについていること。

《参照箇所》

- ① 第4段落1・2文目
- ② 第4段落1・2文目
- ③ 第4段落1・2文目

問二

解答 黙読する新興知識階級と、文字を読めない大衆との分裂(25字)

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 特殊型

解答範囲 第4段落

解説

傍線部の具体的説明として適当な箇所を本文から抜き出す問題である。と
りあえず機械的に、「断裂」と等置しうる言葉を本文から探すと、第4段落
6文目の「分裂」が見つかるので、これを含む「黙読する新興知識階級と、

文字を読めない大衆との分裂」が解答として適切か考えよう。第4段落7文
目によると「知の断裂」は、活版によって市民社会の中に生み出された規模
の大きなものであることがわかる。第4段落5・6文目より、「分裂」は活
版印刷の登場によって生まれたものであることがわかり、これは条件に合致
する。また、新興知識階級と大衆はともに市民社会の構成員であり、市民社
会がこの二層に分裂したことは大規模であるともいえるだろう。内容的にも
捉えておくとすれば、新興知識階級は印刷物を読み知識を得るものの、その
知識は文字の読めない大衆には伝わらない(これが「黙読」である)という
構図は「知の断裂」と呼ぶに相応しい。最初に挙げた箇所を解答としてよい
と結論される。

問三

解答 機械的で精巧な複製の実現により、芸術の一回性に基づく神聖さが弱

まったということ。(40字)

難易度 ★★★★★

設問パターン 要約型十具体化型

解答範囲 第7・第8段落

解説

傍線部を適切に換言して述べる問題である。「複製技術」「儀式」を本文中
の語のみで適切に換言することは難しく、メディア論に関する予備知識があ
ると非常に有利な設問であると思われる。本文中で専門的な語句の説明が十
分でないため、予備知識のない人にとっては「空気を読んで」答案を作成す
ることを余儀なくされる厳しい設問であるかもしれない。

「複製技術(技術的複製)」を適切に言い換えるにあたって、意識すべきポ
イントは一点、第7段落1文目でふれられた「模造」との差異である。木版

や印刷術による「複製」と、それ以前の「模造」との差異をどう表現するか。技術的であるか否かとするのは身もふたもないが、本文中にはそれ以上の表現は存在しない。「ここ」で「技術的である」ということはどういふことかを、本文中の具体例から考える必要が生じる。さまざまな表現が考えられると思うが、「ここ」では「画一的な作業で短時間のうちに大量に実行することができ、しかも高品質である」というニュアンスをくんで、「機械的で精巧な」という表現を用いることとする。「再現度の高い複製の大量生産」「緻密な複製を効率的に生産」等、「模造」との差異が表現されていればよい。

「儀式から解放」をどう説明するかを考えるうえでまず、第8段落1文目と、続く2文目で同様の内容が繰り返されていることに気づきたい。「礼拝価値」は「儀式」に基づき、「展示価値」は「政治」を土台に据える、という構図を読み取ることができる。本文中に「礼拝価値」「展示価値」の意味は直接述べられていないが、「儀式から解放」がすなわち「礼拝価値の衰え」を意味することはわかる。第7段落で複製技術時代に「オリジナル作品のもつ（いま）ここ」という「一回性」「アウラ」が衰退することが述べられているので、この「礼拝価値」は「アウラ」に紐づいていると考えるのが自然であろう。よって、「儀式から解放」は「一回性に基づく礼拝価値が弱まった」などと表現できそうだ。しかし、「ここでは「礼拝価値」についてさらにもう一歩踏み込んでみたい。この「礼拝価値」とは、つまり何のことなのか。安直に言葉を補うとすれば「礼拝対象としての価値」であると思うが、それはいったいどういう性質だろうか。本文から引っ張ってくるのであれば、第4段落に登場した「聖性」、それを言い換えた「神聖さ」が妥当であると考えられる。そもそも第4段落は、活版印刷という複製技術によって本が神学のくびきから解放されたという内容が含まれており、これは第8段落冒頭の議論と同形である。

以上の内容を字数制限内でまとめると以下のようになるので、これを解答とする。「機械的で精巧な複製の実現により、芸術の一回性に基づく神聖さが弱まったということ。(40字)「

《解答要素》

- ① 「複製技術」を「模造」との差異を示しつつ言い換えられていること。
- ② 「儀式から解放」を「礼拝価値の衰退」の意味で言い換えられていること。
- ③ 「礼拝価値」が「アウラ」に基づいていることを指摘していること。

《参照箇所》

- ① 第7段落1・2文目
- ② 第8段落2文目
- ③ 第7・第8段落

問四

解答

書籍が電子化し物質性を失うことで、本が伝えるひとまとまりの知識がネット上の膨大な情報群の断片的要素となり、書籍の流通・利用に關する物理的制約が大幅に除かれる点。(80字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 第9段落

解説

「画期的な点は何か」という特徴的な問い方が目を引く設問である。こう問われている以上、ある程度具体的なデジタル革命の成果を解答の軸に据えねばならないから、まずはその成果を捉えるところから始めよう。具体的な

成果としては、第9段落5文目より、「本がいつでもどこでも入手可能なものとなったこと」、第9段落6文目より、「本を保管する空間が要らなくなったこと」「必要な情報を必要な書籍から探し出せるようになったこと」、第10段落より「誰もが情報を送受信できるようになったこと」を挙げることができる。これら4つの電子書籍化の成果に共通する特徴は、第9段落2文目にある通り、「物質性の消滅」という言葉で言い表すことができる。「物質性の消滅」は本が電子化して実体をもたなくなったということであるが、4つの成果はすべて、本が物質であったがゆえに不可能であったことが電子化で実体を失ったことによって可能となった、という構図に落とし込むことができる。「物質性の消滅」によって「物理的制約が除かれた」といったところであろうか。

ある技術・現象の画期的な点を問われたときに、その解答として、具体的な成果を伴わないものは問題外であるが、具体的な成果のみであるものもまた適切でない。そのメカニズムを簡潔に述べたうえで、得られる成果を述べるべきであると思う。本問においては、「デジタル革命」（本の電子化）がどのような過程を経て「物理的制約を除く」のかについて述べる必要がある。この流れは第9段落3・4文目で述べられている。つまり、本という枠組みの中でひとまとまりにされて伝えられていた知識が、断片的な情報となって電子空間内の情報群に組み込まれる、という過程を解答の要素とすることができる。

以上の要素を字数制限に合わせてまとめると以下のようになるので、これを解答とする。「書籍が電子化し物質性を失うことで、本が伝えるひとまとまりの知識がネット上の膨大な情報群の断片的要素となり、書籍の流通・利用に関する物理的制約が大幅に除かれる点。（80字）」

《解答要素》

- ① 「デジタル革命」において、「本の電子化」とそれに伴う「物質性の消滅」が起きることを指摘していること。
- ② ①により、本の伝える知識が断片化しネット上の膨大な情報群の要素となることを述べていること。
- ③ ①②を受けて、書籍の流通・利用に際する物理的な制約が少なくなることを述べていること。

《参照箇所》

- ① 第1段落、第9段落2文目、第10段落
- ② 第9段落3・4文目
- ③ 第9段落5～7文目

問五

解説 電子書籍が普及した場合、今まで本の物質性に依拠して維持されていた文化装置と同等のものを実現し、従来通りの人間の知の在り方を守ることが難しいのではないかとという点。（80字）

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 第10・第11段落

解説

「紙派」の「電子派」に対する批判点を述べる問題である。書籍のデジタル化によって失われるものについては第10・第11段落に述べられているため、そこを中心にとまとめることとなるが、具体例に終始することなくデジタル革命の本質にまで踏み込んで解答したい。また、著者は「紙派」「電子派」についてある程度中立の立場から意見を述べているが、本問の解答では「紙派」

の主張を述べねばならないので、偏っているともとれる視点を導入してかまわない。

第10・11段落で大きく取り上げられている具体例は、個人による出版の氾濫が従来の制作・流通の回路に影響を与えうるという例であった。この例を受けた第11段落4文目の内容がまず「一つの要素である。『従来『紙の本』が果たしてきた文化装置を、ネット上に構築できるか』が論点であり、『紙派』は「困難である」と主張するはずである。また、この要素の説明として第9段落に述べられていた「本の物質性の消失」も解答に組み込みたい。

では、その「文化装置」の維持が困難なこととはどうして批判の対象となるのか。そこで述べられているのが、第11段落後半部の「人間そのものを変容させる」可能性である。「文化装置」が維持されなくなると「文化装置」が培ってきた「知の基盤」が損なわれる。そのことによって、知を中心とした人間の在り方が変容してしまうことも考えられる。「紙派」の「電子派」に対する批判の核には、アナログ革命の際にも見られたような、メディアの変化に伴う「人間そのものの変容」への危惧があると考えられる。

以上の内容を字数制限に合わせてまとめると以下のようなになるので、これを解答とする。「電子書籍が普及した場合、今まで本の物質性に依拠して維持されていた文化装置と同等のものを実現し、従来通りの人間の知の在り方を守ることが難しいのではないかという点。(80字)」

《解答要素》

- ① 本の物質性の消滅についてふれていること。
- ② ①の状況下では、従来の文化装置を維持することが困難であるということと述べていること。

- ③ ②によって、人間の知の在り方が変容してしまうことへの危惧を述べて

いること。

《参照箇所》

- ① 第9段落
- ② 第11段落4文目
- ③ 第11段落5～7文目

(森慎太郎、石川卓郁、高橋粒)

2015年度 北海道大学 前期 国語

三 古文（歌学書）

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	20分	藤原清輔『奥義抄』からの出題。平安時代の歌学書。作者・藤原清輔（一一〇四～一一七七年）は平安時代末期の歌人・歌学者。古今和歌集に収められた「ながらへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき」の歌は小倉百人一首にも選出されている。	本文は物語仕立ての前半部と評論調の後半部からなる二部構成。前半部については話の展開・主語の特定・用いられている古文表現のいずれも難しいところはない。一方、前半部を踏まえて和歌の解釈を論じる後半部はわかりにくい記述が多く、意識的に内容を整理する必要がある。和歌二首についても、主題の読み取りやすい第一の和歌に比べ、第二の和歌は単語・主題ともに難解であった。 問一の単語訳を除けば、設問はすべて和歌の解釈にかかわる記述問題である。いずれも、一度本文の記述を整理したうえで設問の要求に応える解答をつくる必要があり、解答に必要な要素と不要な要素を区別する意識が求められる。

傾向と対策

北海道大学の古文は、平易な本文に読解の正確さを問う設問を組み合わせて出題することが多い。基本的な古文単語をおさえていることを前提に、自分の解答の根拠を意識しながら記述問題の練習を積むことが重要である。

《この解説の使い方》

本文読解

「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか（「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分）や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど（「通読」の★部分）について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使い過ぎる人は、この項目を見てみよう。

設問解説

設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説

「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識でつくれる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

解答

問一 イ 偶然 口 長年

問二 もとの妻のために海布を探す途中姿を消した男が男を待つ女を想って詠んだ歌なので、もとの妻を指す。（47字）

問三 長年親しんだ女を、「橋姫の物語」で男がもとの妻を指して詠んだ宇治の橋姫にたとえている。

年老いた人を、橋を守る神である宇治の橋姫にたとえている。

問四 年老いた人を神にたとえるのはわかるが、万物に神が宿る以上、その神を「宇治の橋姫」に限定する理由がわからないので。(56字)

本文読解

本文を読み始める前に

前書き・注から事前に読み取るべき情報は特にない。

通読

第1行「さむしろに宇治の橋姫」

◎自分のことを待っている「宇治の橋姫」なる女性に思いをさせて詠んだ歌だろう。

★本文に和歌が現れたときは、とりあえず主題⇨下の句をおさえるよう心掛ける。

第2行～第3行「此の歌、橋にけるを、」

◎「さはり」「七色の海布」「龍王」といった見慣れない単語が続くが、要は「もとの妻のために海辺に行った男が行方をくりました」という筋のようだ。

第3行～第4行「もとの妻尋ひにけり。」

◎傍線部があるが、やさしい問題なので一読目で解答する。

第4行「此の歌をうづば失せぬ。」

◎「此の歌」が指すのは当然冒頭の和歌。

◎問二を念頭におき、和歌の「宇治の橋姫」を特定するヒントがないか意識しながら読み進める。

第4行～第5行「この妻、泣くりにけり。」

◎「泣く泣く帰った」という妻の反応から「宇治の橋姫」が誰かを考えるのは難しそうだ。問二の解答の手掛かりを得るにはもう少し読み進める必要がある。

第5行～第7行「今の妻このくせにけり。」

◎「さむしろに」の歌を聞いた今の妻は逆上した。もし今の妻が「宇治の橋姫」なら、「もとの妻を恋ふるこそ」などとは考えないはず。よって「宇治の橋姫」⇨もとの妻。

◎ここまでが「橋姫の物語」の内容のようだ。

第7行～第8行「世のふる物へのへぬれば」

★「集云」は「古今和歌集に云わく」の略記だが、本文の読解や設問の解答には必要ない。覚える必要がある表現でもない。

◎第二の歌の主題は「長年寄り添った女性をいとしく思う」といったところか。上の句は「なれ」「千はやぶる」など意味がわからない言葉が並ぶが、とりあえず下の句の意味が取れているので気にしない。

★「千はやぶる」は①「神」や神に関連する語②地名の「宇治」を導くが、

「枕詞」は和歌の内容に影響しない語句であることさえ理解すればよい。

第9行「これも此のゝるにこそ。」

◎「此の事」が指すのは前半で語られた「橋姫の物語」のことだろう。

◎問三によれば、第二の歌の「宇治の橋姫」については、本文で二通りの解釈が示されるらしい。どこの二つの解釈の境目なのか、考えながら読む。

第9行と第10行「かのをとこそぞみゆる。」

◎「かのをと」「もとの妻」は「橋姫の物語」の登場人物を指すのだろう。

◎続く接続助詞「ば」で主語が変わっている可能性に注意する。第二の歌の説明なのだから、「よそへてよめる」のは第二の歌のことだろう。やはり、「ば」の前後で主語が異なっているようだ。

◎この箇所は明らかに「宇治の橋姫」の箇所の第一の解釈に当たるだろう。

◎傍線部を発見。簡単な単語訳なので解いてしまおう。

第10行「千はやぶるゝにこそは。」

◎非常に読みにくい一文だ。「かのをとこ女」は「橋姫の物語」の男と女の妻のことだろうか。いずれにせよ、「千はやぶる」の意味がわからないので正確に読むのが難しい。ひとまず読み飛ばす。

★一見ふさわしくない「千はやぶる」という枕詞が第二の和歌に用いられた理由を推測している一文だが、そもそも「千はやぶる」が神にかかわる語を導くことを知らなければ意味がない。読みとばすのが正解である。

第10行と第11行「又よろづのまじひ也。」

◎「又」とある以上、「こ」で話が変わるのだろう。「こ」から第二の解釈を

述べた箇所とみてよさそうだ。

★このあたりから展開する第二の「宇治の橋姫」解釈は、よく整理された文章に慣れ親しんでいる現代人の感覚からすれば理路整然とした論とはいいたいがたい。ある程度図式的に整理しながら読み進めることになるが、それでも納得のいかない箇所は残るはずだ。「完璧な読解」に向かう気持ちをこらえ、「解答にかかわらない部分の矛盾・不整合は気にしない」という方針を貫徹しよう。

第11行「されば橋をくられたり。」

◎「されば」とある以上、前の部分を受けた一文のはずだが、いまひとつ腑に落ちない。万物に神が宿ることと橋を守る神を橋姫とよぶことの間には、「されば」で結ばれるような関係はないのではないだろうか。

第11行と第12行「神はふるきゝたるにや。」

◎「よそへたる」は「なぞらえている」とある以上、第二の解釈の核はこの一文だろう。

第12行「宇治の橋姫こそ心得ぬ。」

◎直前までの内容を受けて素直に考えるならば、「神を年老いた人になぞらえるにしても、その神を宇治の橋姫に特定する理由はわからない」という一文だろう。

第13行「神をひめ、くな神なり。」

◎さまざまな神の名前が列挙されている。

◎本文読了。解き残した問題に取り組む。

設問解説

問一

解答 イ 偶然 □ 長年

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

イ

古語「おのづから」の意味は、①自然に・ひとりでに②たまたま・偶然部ではどの意味で用いられているのかを判断する。

③(仮定・推定の表現を伴い)ひょっとすると」の三つに大別できる。傍線部ではどの意味で用いられているのかを判断する。

傍線部とその前後を抜粋すると、「浜辺なる庵にやどりたりける夜、おのづから此のをどこにあひにけり。」とある。これは、失踪した男をもとの妻が探し求めるうちに、その男に「おのづから」出会えたという場面である。「おのづから」の三つの意味のうち、「こ」で最もふさわしいのは「たまたま・偶然」の意。

□

「としごろ」「は」長年」を意味する重要な古語。前後を見ても、「こ」では「長年」の意で問題ない。

問二

解答

《合格答案》

自分の欲した海布を探しにいった男を待つ、もとの妻を指す。(28字)

《満点答案》

もとの妻のために海布を探す途中姿を消した男が男を待つ女を想って詠んだ歌なので、もとの妻を指す。(47字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型十理由補填型)

解説

まずは第一の和歌自体を簡単に解釈したうえで解答を試みる。難しければ、本文の内容を根拠に考えていく。

第一の和歌「さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらむ宇治の橋姫」を簡単に現代語訳する。「さむしろ」は「むしろ」「すなわち」敷物」のこと。「衣かたしき」は漢字で書けば「衣片敷き」。寂しくひとり寝をするさまを表現するのに用いられる。「こよひ」は「今晚」。「まつらむ」は動詞「待つ」と現在推量の助動詞「らむ」。よって、全体の直訳は、「むしろに衣の片袖を敷いて今晚も私を待っているのだろうか宇治の橋姫は」となる。かりに「さむしろに衣かたしき」の部分がわからずとも、男が自分のことを待っている女を想って詠んだ歌であることは下の句からわかる。

しかし、直訳から読み取れるのは「自分を待っていてくれる女に思いを馳せる」という和歌の主題のみであり、男のことを待つ女、「宇治の橋姫」を特定することは難しい。よって、和歌外の内容、つまりこの歌が詠まれた状況を手掛かりに「宇治の橋姫」が指す人物を考えていく。

男が「さむしろに」の和歌を詠んだのは本文中二回、いずれももとの妻あるいは今の妻が、行方の知れなくなった男のことを「尋ねありきけるほどに、浜辺なる庵にやどりたりける夜」のことである。男が浜辺で行方知れずとなったのは「海辺にゆきて龍王にとられて失せ」てしまったからであり、さらに、男が海辺に行ったのは、「もとの妻さはりして七いろの海布をねがひける」ことに応えてのことであった。「さむしろに」の和歌を詠んだときの男

の視点に立てば、もとの妻の望みに応じて海布を求めに行ったきり、龍王に捕えられてもとの妻のところへ帰ることができなくなっている状況なので、自分のことを「待たらむ」と思いをはせる相手はもとの妻のはずである。

問三

解答

《合格答案》

長年親しんだ女を、「橋姫の物語」中のもとの妻にたとえている。
年老いた人を神にたとえている。

《満点答案》

長年親しんだ女を、「橋姫の物語」で男がもとの妻を指して詠んだ宇治の橋姫にたとえている。

年老いた人を、橋を守る神である宇治の橋姫にたとえている。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明（要約型）

解説

設問にある「文意をふまえ」との指示に従い、作者が第二の歌に与えた解釈を参考にして解答をつくる。

まず、第二の歌「千はやぶる宇治の橋姫なれをしもあはれとおもふとしのへぬれば」の簡単な現代語訳を試みる。「千はやぶる」は有名な枕詞で、①「神」や神に関連する語、または②地名の「宇治」にかかる。しかし、枕詞は特定の語句を導くために用いられる表現技巧であり、現代語訳に反映する必要もないのでここでは深く考えない。難しいのは「なれをしも」の処理である。「しも」が強意の副助詞であることまでは見抜けても、「なれ」の意味がわからない受験生は多いだろう。この「なれ」は漢字で書けば「汝」とな

り、現代語の「お前」などと同じ二人称代名詞である。「あはれ」は感嘆詞ではなく形容動詞「あはれなり」の語幹と捉えたほうが自然。「あはれなり」はしみじみとしたさまざまな感情を表す語だが、「こ」では文脈が抜け落ちていたので意味の判定は難しい。以上を踏まえると、第二の歌の直訳は「宇治の橋姫、お前をしみじみ愛おしいと思う。歳月がたったので」となる。「千はやぶる」が枕詞であることさえ知っていれば、「なれをしも」がわからずともおおよその主題はつかめただろう。問いの要求はあくまで「文意をふまえ」た解釈の整理なので、この程度の現代語訳ができれば十分である。

次に、この簡単な現代語訳をひとまずの前提としつつ、第二の歌に対する作者の解釈を整理していく。「二通りに分けて」というのが設問の指示だが、本文の記述にもとづけば「かのをとこ」はべりけるにこそは。」が第一の解釈、「又よろづの物にはくみな神なり。」が第二の解釈にあたる。和歌直後の一文「これもくにこそ」は両方の解釈にかかわると見なしてよいだろう。

まず二つの解釈に共通しておさえるべきは、「これも此の事を思ひてよめるにこそ」＝「第二の歌もこのこと（＝橋姫の物語）を念頭において詠んでいるのだ」という作者の考えである。この点を確認したうえで、続く第一の解釈「かのをとこ、もとの妻にしのみたるものなれば、としごろなれける人などを橋姫によそへてよめるとぞみゆる。」の箇所を見てゆく。この一文は接続助詞「ば」を挟む二つの要素からなる。すなわち、①「かのをとこ」がもとの妻を慕ったこと②第二の歌の詠み手が長年親しんだ人を橋姫にたとえて詠んでいることである。このようにまとめたとき、第一の解釈の核が②の部分にあることは明白だが、これだけではなぜそのような比喻を用いたのかかわからない。そこで、「第二の歌もこのこと（＝橋姫の物語）を念頭において詠んでいる」ことを思い出し、橋姫の物語にふれた①の箇所からその

理由を考える。

①と②が順接確定条件を表す接続助詞「ば」で結ばれている以上、①が②の根拠・理由としてはたらいっているはずであるが、一見してそのような内容のつながりが①②には見出されない。したがって、この二つの要素がスムーズにつながるように、③「かのをとこ」がもとの妻を「宇治の橋姫」として第一の歌に詠んだという内容を加える必要がある。つまり、①「かのをとこ」がもとの妻を愛しており、③その妻を歌の中で「宇治の橋姫」と詠んだので、第二の歌の作者は②長年慣れ親しんでいる女を橋姫の物語の「宇治の橋姫」になぞらえた、ということである。

第二の解釈については「神はふるきものなればとしへたる人によそへたるにや。」の一文に注目すればよい。神とは「よろづの物」について「その物をまもる」ものであると説明され、「こ」での「宇治の橋姫」は「橋をまもる神を橋姫とはいふとも心得られたり。」と解される。「としへたる人」は「歳月を経ている人」、つまり老人のこと。「古いものであるところの神を年老いた人にたとえているのだろう」というのが文意であるが、解答を書く際には「老人を神にたとえている」と語順を改め、さらに神が具体的には橋を守る神としての宇治の橋姫を指すことを補う必要がある。以上をまとめて解答とする。

最後に、第一の解釈に関して一点補足しておく。「もとの妻」「宇治の橋姫」「としごろなれける人」の関係を自力で整理した人の中には、解説の説明の仕方と違和感を抱いた人もいるのではないだろうか。その点について述べておく。

本文の記述のみにもとづけば、これら三者の関係の捉え方としては次の二

通りのものが成り立つ。まず、①「宇治の橋姫」は常に「もとの妻」を指し、「としごろなれける人」はこの「宇治の橋姫」＝「もとの妻」にたとえられた、という先ほど解説で示した通りの整理。もう一つが、②「宇治の橋姫」という単語がもともと存在し、第一の歌は「もとの妻」をこの「宇治の橋姫」になぞらえたもの、第二の歌は「もとの妻」がなぞらえられたような「宇治の橋姫」に「としごろなれける人」をなぞらえたものだ、とする整理である。②の観点に立つて考えると、作者が本文で示した第一の解釈は「としごろなれける人」を「宇治の橋姫」にたとえたもので、「もとの妻」にたとえたわけではないことになる。つまり、異なる解答が生まれる。

実際、純粹に本文の記述のみに注目した場合にはこの二つの整理に優劣はつけがたい。しかし、問一において、設問作成者は「第一の歌の宇治の橋姫は、男の二人の妻のうちどちらを『指す』と考えられるか。」と問うているのであって、「二人の妻のどちらを宇治の橋姫に『なぞらえている』と考えられるか」とはしていない。この点を踏まえれば、もともと存在する「宇治の橋姫」に「もとの妻」を「なぞらえた」とする②の解釈に比べ、あくまで「宇治の橋姫」は「もとの妻」を指す言葉であると捉える①の解釈が優位に立つ。よって設問全体の整合性という観点から、本解説では前者の整理を正答として掲げた。

問四

解答

《合格答案》

年老いた人を神にたとえるのはわかるが、「宇治の橋姫」に限定する理由がわからないので。(42字)

《満点答案》

年老いた人を神にたとえるのはわかるが、万物に神が宿る以上、その神を「宇治の橋姫」に限定する理由がわからないので。(56字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型+理由補填型)

解説

問三で整理した第二の解釈に対して疑問を呈する一文を読み、その根拠をまとめる問題である。問三を解く段階で十分な整理が行えていれば、さほど難しくはない。

傍線部を簡単に現代語訳すると、「宇治の橋姫と指しているのが理解できない」となる。文末の「ぬ」が係助詞の係り結びによって連体形に活用していることに注意。この「ぬ」は完了ではなく打消である。続く二文「神をひめくみな神なり。」を読めば、年老いた人を神にたとえる際、さまざまな神がいる中で、「宇治の橋姫」という特定の神になぞらえなければならぬ理由がない、という作者の考えは読み取れるはずである。あとは字数制限に合わせて解答をまとめればよい。

本文解説

現代語訳

さむしろに……(敷物に着物の片袖を敷いて今晚も私を待っているのだから)宇治の橋姫は

この歌は、橋姫の物語にある。昔、妻を二人持っていた男が、もとの妻が月経をして七色の海布を望んだため、探しに海辺に行つて竜王に捕まえられて姿を消してしまったのを、もとの妻が探し求めまわったときに、浜辺にあ

る庵に泊まっていた夜、偶然この男に出会った。この歌を歌って海辺からやって来たのであった。(男は)そうしてことの経緯を話して、夜が明けるといなくなった。この妻は泣く泣く帰ってしまった。今の妻がこのことを聞いて、はじめ(の女)のように行つてこの男を待つと、(男は)またこの歌を歌つて来たので、私を見捨ててもとの妻を慕うのだといまいましく思つて、男につかみかかつてしまったところ、男も家も雪などが消えるように消えてしまった。

世の昔の物語なので詳しくは書かない。古今和歌集に、

千はやぶる……(宇治の橋姫お前をもしみじみと思つ。歲月がたったので)

これもこのこと(＝橋姫の物語)を思つて詠んだのである。例の男は、もとの妻を慕わしく思つていたものである。長年親しんだ人などを橋姫になぞらえて詠んだとみえる。「千はやぶる」とあるのは、あの男女は昔の世のことであるので、神であったのでしょう。また、いっさいのものにはそのものを守る神がいる。いわゆる魂である。それゆえ橋を守る神を橋姫とよぶということも自然と納得された。神は古いものなので年を取っている人になぞらえているのであろうか。(しかし、)宇治の橋姫と指しているのはわからない。神をひめ、守りなどということとはふつうのことである。さおひめ、立田姫、山ひめ、しま守り、みな神である。

用語解説

ありく「自力四」①歩き回る②(補助動詞として)あちこちでくして回る
おのづから ①自然に②たまたま③(仮定・推量を伴い)ひよっとすると
さて ①そのまま②そこで・そうして

ねたし ①憎らしい・いまいまいしい②悔しい③ねたましいほど優れている

あはれなり ①しみじみと心動かされる②しみじみとした風情がある

しのぶ【偲ぶ】「他バ四・他バ上二」 思い慕う・懐かしく思う

としごろ【年頃】 長年

よそふ【他ハ下二】 たとえる・なぞらえる

・四段活用動詞「よそふ」【装ふ】「と混同しないよう注意。」

よ【世】①世間・俗世②現世③男女の仲

されば だから

・形がよく似た「さらば」と混同しないよう注意。どちらも「そうである・

そのようである」を意味する変動詞「さり」に接続助詞「ば」がついた

ものだが、「されば」は「さり」の已然形、「さらば」は未然形がそれぞれ

接続している。「このことを意識すると、両者の意味の違いもわかりやすい。

(上岡公聖、築島愛美、田村進也)

2015年度 北海道大学 前期 国語

四 漢文（北宋の隨筆）

難易度	★★★★☆
所要時間	25分
出典	唐子西「古硯銘」(『古文眞宝後集』卷之五 銘類) からの出題。唐子西は北宋末の詩人。「子西」は字で、本名は庚。蘇軾と同郷で、のちに流罪となった場所も蘇軾と同じであったうえ、文才も優れていたため「小東坡(東坡は蘇軾の字)」とよばれた。唐庚にとって詩をつくるのはひどく大変なことだったらしく、「何日も苦勞して詩をつくっても、翌日に読み返せば欠点が多く見つかり、また何日も考え直すことを繰り返すのだ」とその苦勞を述べている。『古文眞宝』は宋く元の詩文集。「古硯銘」は中でも有名な文章。
傾向と対策	字数は17字と標準的。論理展開は丁寧で追いやすく、内容も平易で、作者の主張をつかむのは容易。「鈍・静」⇄「鋭・動」の対比をつかめるかどうか最大のポイントであった。ただ、現代語訳や作者の主張をまとめる際に、「鈍」「静」「鋭」「動」「体」「用」といった概念にじっくりくる言葉を当てはめるのが難しかったことだろう。それぞれの概念が硯など文房具に対して使われるときと人に対して使われるときで

傾向と対策

使い分けたいところ。本文をサクサク読んでしまっって、言い換えに多くの時間を使うべきだった。

問一は例年どおり教科書レベルの問題。問二は「独」をどのように解釈するかがポイントであった。候補となる二つの用法を思い浮かべ、きちんと論理的に片方を選択できたかどうか。問三では「豈非く乎」の詠嘆形の訳出を求められた。文法の「穴」としてしばしば出題されるのでしっかり確認しておこう。問四は文脈を理解できていれば容易。問五はどの要素を書くのか正しく取捨選択する必要があった。

《この解説の使い方》

本文読解

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワランク上の読み(☆)、脳内で把握された内容(▼)を適宜載せてある。

設問解説

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

本文読説

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名(作品名を書き下す場合を除く)のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

解答

問一 C ここにおいて

D あるひといはく

E しっかりといへども

問二 ひとりじゆえうのみあひちかからざるなり

問三 なんと、ずんぐりしたものは長持ちするが鋭くがったものは短命なのだなあ。

問四 此…とがらずじっとしていること

彼…鋭くよく動くこと

問五 寿命は運命であるとしても、かどがなく動き回らないゆえに寿命が長い硯にならって、攻撃的にならずおおらかな心を持ち、物事に動じず冷静に落ち着いて行動する。(75字)

本文読解

通読

硯すずりと筆墨と、蓋し気類するなり。

◎硯、筆、墨か。文房具として同類。

出処相近く、任用寵遇相近きなり。

▼使用状況・方法が似ている。

◎まあそうかもしれないなあ。

A 独寿天不相近也。

◎書き下しの問題っぽいなあ。「独」が文頭にあるってことは、反語か限定かどっちかだろう。注より、「寿天」は長寿と夭折ようせつ。「夭折ってどういう意味だっけ……」。

筆の寿は日を以て計かぞへ、墨の寿は月を以て計へ、硯の寿は世を以て計ふ。

◎「寿」は寿命だろう。筆は日単位、墨は月単位、硯は世代単位か。筆はそんな何日かたつたら使えなくなるんだ。硯は世代を超えて受け継がれるんだなあ。

其の故は何ぞや。其の体たるや、筆最も鋭く、墨之に次ぎ、硯鈍き者なり。

◎寿命の違いがある理由。筆が鋭いってことは「体」は「形」かな。硯は「鈍」な形かあ……。「鈍器」みたいなイメージかなあ。

B 豈に鈍き者寿にして鋭き者天なるに非ずや。

◎現代語訳の問題っぽい。「豈」があるから反語かな……いや、「豈非」だから詠嘆か。危ない危ない。「鋭者」は筆のことか。「寿」と対比されるし、「天」は短命、という意味かな。

▼「鈍」なものは長生きだけど「鋭」なものは短命なんだなあ。

◎確かにパンクロッカーは早死になイメージがあるもんな。

其の用たるや、筆最も動き、墨之に次ぎ、硯静かなる者なり。

◎筆が一番動いて硯が一番静かってことは、「用」は「はたらき」くらいかな。それにしてもさつきも似たような文があったなあ。「其の体たるや」の文だ。筆・墨・硯について「体」「用」二つの視点から比べて

いる。

豈に静かなる者寿にして動く者天なるに非ずや。

◎これも傍線部Bと同じかたちだ。

▼静かなものは長持ちして、動くものは短命だなあ。

吾。於_レ是_レ生を養ふを得たり。鈍を以て体と為し、静を以て用と為さん。

◎「生を養ふ」ってなんだろう。作者は「鈍」「静」になろうとしているみたいだ。

☆「養生」熟語としてみたら「養生」。病気が治るように、という意味で使うことが多いけれど、「健康の増進に努めて長生きする」意味もあつたな。これまでも「寿」の話をしていた。作者が長生きするために硯に倣おうとしているのかな。

◇或曰、「寿夭は数なり。鈍鋭動静の制する所に非ず。借_レ令_レ筆_レ鋭_レからず動_レかざるも、吾其の硯と与に久遠なる能はざることを知るなり」と。

◎傍線部Dは「あるひといはく」、これは簡単。ある人の言った内容を見つこう。

☆さあ、ある人は筆者に賛成しているのか、反対しているのか……?

▼ある人の言うことには、「寿命は運命だ。自分でどうにかできるものじゃない。もし筆がとがってなく動かなくても、硯と同じように長生きすることはできない。

◎ある人は筆者の考えに反対している。

E 雖_レ然_レ寧_レろ此を為すとも彼を為すこと勿_レれ。

◎「雖然」だから、作者は「或」の言うことはまあもつともだと思いがら反論している。傍線部Eは選択形だ。「寧ろ鶏口となるも牛後となるなかれ」に似ているなあ。あれは、大勢の下っ端（＝牛後）になるよりも小集団のトップ（＝鶏口）になったほうがいいって意味だった。するとこれは「為此」＜「為彼」なのか。「此」「彼」はなんだろう。文脈的に、作者は「鈍＋静」がよくて「鋭＋動」はやめよう、と言っているけど……。

銘に曰く、「鋭きこと能はず、因りて鈍を以て体と為す。動くこと能はず、因りて静を以て用と為す。惟だ其れ然り、是を以て能く年を永らふ」と。

◎「銘曰」ってなんだろう。どこかに刻んであるのかな。「鈍」「静」で長生き。作者の主張はこれでよいのだろう。

☆「或」に反論されて、受け入れながらも「鈍」「静」でいたいと思った作者が、自分の硯にでも刻んだのかな。硯のセリフっぽいし。

設問解説

問一

解答 C ここにおいて

D あるひといはく

E しっかりといへども

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 漢字の読み

解説

北大漢文の問一らしい、相変わらずの基本問題。ここはすべて正解したい

し、もし初見のものがあれば絶対に覚えておきたいところだ。

C

「是以」「以是」「於是」「如是(若是)」といったように、「是」を用いた複合語は多い。ちなみに読みは上から「ニニヲもつテ」「コレヲもつテ」「コニおいテ」「カクノ「コトシ」となる。ややこしいが頻出なのでしっかり覚えよう。

D

「曰」を「いはク」と読むのはわかるだろう。問題は「或」である。この字は「あるイハ」と読むことが多い。が、「あるトト」と読んで主語になることもしばしばある。述語の前にあるときには注意。

E

「雖」は「ストイヘドモ」と読み、「たとえ」としても(逆接仮定条件)「スではあるが(逆接確定条件)」で訳す。「然」は接続詞として「しかラバ(順接)」「しかルニ・しかレドモ(逆接)」と読んだりもするが、今回は動詞「しかり(その通りだ)」。『雖然』は漢文ではよく使われるかたち。

問二

解答 ひとりじゆえうのみあひちかからざるなり

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン ひらがなの書き下し

解説

北大定番の歴史的仮名遣いでの書き下し問題。(例)に「ならふ」とある

歴史的仮名遣いで書き下すよう指定されている。見落とさないように。ポイントになる字は「独」。これが文頭にあるとき、多くは「ひとりノミ」と書き下す(限定形)か「ひとりノヤ」と書き下す(反語形)のどちらかである。ここを判断していく必要がある。

傍線部Aを見てみよう。「寿夭」とは注に「長寿と夭折」とあるとおりである。夭折とは、若くして死ぬこと。「相近」は一文前に「出処相近…」とあることから、「相近し〓互いに似ている」であるとわかるだろう。したがって傍線部Aの書き下しの候補は、

「(限定形)独り寿夭のみ相近からざるなり〓ただ長寿と夭折だけが互いに似ていないのだ」または

「(反語形)独り寿夭相近からざらんや〓どうして長寿と夭折が互いに近くないだろうか、いや長寿と夭折も互いに似通っている」である。

それでは次に、書き下しの候補と文脈を照らし合わせながら、正しい書き下しを考えていこう。

傍線部Aの前を見てみよう。硯・筆・墨は使用状況や使用方法が互いによく似ている、ということが書いてある。これだけでは傍線部Aの書き下しはわからない。続いて傍線部Aのうしろを見てみよう。筆・墨・硯の寿命をそれぞれ日・月・世代によって数え、それぞれの寿命が、現代風にいえば桁違いであることを示している。したがって、作者は「硯・筆・墨の寿命は異なっている」と主張しているのである。

よって、傍線部Aの「独」は限定形「ひとりノミ」である。書き下しは「独り寿夭のみ相近からざるなり」となる。あとはこれを歴史的仮名遣いをういてひらがなにするだけ。

今回、ひらがなに直すうえで間違いが多かったと予想されるのが「寿夭（じゅえう）」である。ちよつとこれは難しかったかもしれない。

教科書に掲載されることもある、詩経の「桃夭」という詩は「桃之夭夭（もものえうえうたり）」で始まる。解説作成者は授業中にちらつと見て「えうえうってすごいな」となんとなく思い、そのおかげで覚えた。知らなかったものはどうしようもないので、この機会に覚える……ほどでもなく、頭の片隅にひっかけておくくらいでよい。

問三

解答 なんと、ずんぐりしたものは長持ちするが鋭く上がったものは短命なのだなあ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

現代語訳の問題。

返り点がついているので、まずは書き下してみよう。「豈に鈍き者寿にして鋭き者夭なるに非ずや」となる。ここまではスムーズにいったらう。

文法的な最大のポイント、つまり出題者が重視している点は「豈非」である。「豈ニ〜哉」は「どうして〜なのか、いや〜でない」と反語で訳す。だが、「豈不〜」や「豈非〜」のように「豈十否定の語」の場合は、「なんと〜ではないか」と詠嘆で訳すことが多い。これはいろいろな大学の入試で「穴」としてよく出題される。この機会にぜひ覚えておきたい。

あとは、「鈍き者寿にして鋭き者夭なる」を訳すだけ。「鈍」「鋭」が対として用いられていることに注意しよう。筆は確かに「鋭い」∥とがっているが、硯を「鈍い」と表現するのは現代語としては不自然だ。ここが意外とや

っかいで、例えば「鈍重」と訳してしまうと、これは反応や動作の鈍さを表す単語なので、硯に適用するには違和感がある。「鈍」を含む熟語で考えていこうとするとなかなか難しい。模範解答では「ずんぐり」としたが、ぴったり合う訳を探すことに時間を費やしすぎるのはよくない。試験場での解答としては「鈍重」あるいは「とがらず」などと逃げ、少しの減点くらい甘受しよう、という感じでよいだろう。

問四

解答 此…とがらずじっとしていること

彼…鋭くよく動くこと

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

指示語を説明する問題。文章の流れをきちんとおさえれば難なく解ける問題である。

傍線部Fは選択形で、ありがたいことに問題文に現代語訳まで書いてある！ あとは作者の主張を整理するだけである。

「此」「彼」といっているからには、その二者は比較・対比されているものとわかる。この文章ですと比較されてきたのは「鈍十静」と「鋭十動」である。したがってこれらがそれぞれどちらかに入るだろうことは予想できる。

ここまでの議論の流れを見てみよう。

作者の意見：「鈍十静」↓長生き
 ← 「或」の意見：「命の長短は運命。生き方で決まるものではない」
 ← **【雖然】**
 ← 傍線部 F (どちらかという)「此」がよく「彼」しないほうがよい)

となつてゐる。この「雖然」は、さうではあるけれども、が唯一の決定的な解答の根拠である。ここから、作者が「或」の発言を受けて「命の長短は確かに運命かもしれないが、それでも『此』のほうが『彼』よりもよい」と考えていることがわかる。「或」の発言の直前で、作者は「以鈍為体、以静為用」と述べている。

したがつて、「此」はとがらずじつとしてゐること、「彼」は鋭くよく動くこと、となる。

「雖然」が唯一の決定的証拠、といったが、そこに注目せずとも解くことができなくもない。前半部分で作者は「鈍十静」こそが長寿の理由だと述べているし、硯に刻んだ銘からも、なんとなく作者が「或」の発言によって当初の意見を変えていない感じはする。

とはいえ、受験生諸君には、なるべくはつきりとした・誰の目にも明らか
 な根拠を探してほしい。第一にそれこそが正規の解き方であるし、第二に寡
 困気で解いているといつか必ず間違ふからである。

問五

解答 寿命は運命であるとしても、かどがなく動き回らないゆえに寿命が長

い硯にならつて、攻撃的にならずおおらかな心を持ち、物事に動じず
 冷静に落ち着いて行動する。(75字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 内容説明

【解説】

傍線部 G は「だから長生きすることができるのだ」という意味。「是以」は重要な複合語なので、問一 C の解説に挙げたものとあわせて覚えておこう。どうすれば長生きできるのか。この答えは5行目「吾於是得養生焉。以鈍為体、以静為用」に集約されているといつてもよい。ただ問題文には「全体の趣旨をふまえて」とある。つまり全体を概観しながら(している感じを出しながら)解答しなければならぬ。とはいえ、こういった問題をどう解いてよいのかわからない人もいるだろう。どの要素を捨てる必要がある、どの要素は捨てるべきかを判断するのは難しい。

本設問でいえば、全体を語るうえで欠かせないのは「硯」の存在である。作者の論は、筆・墨・硯を比べ、硯が「鈍」「静」であるがゆえに最も長生きするということから始まった。そしてそんな硯にならおうとしているのだから、「硯」については必ずふれたい。第一、この文章の面白いところは、「硯のまねをして生きよう!」ということなのだから。

次に悩むところになるのが、「或」の発言だ。彼の意見は作者に対する反対意見である。セオリーとして反対意見は、さらにそれに反駁(はく)することによって作者の主張を強める役割を果たす。したがって通常なら、文字数が余っている場合に「○○」という意見もあるが、××である……」というように書く。反対にいえば、本文中で扱われる分量が少なく、かつ解答の文字数がタイトであるときは、ふれないこともある。ただし今回は、作者が「或」の意見に対して「雖然」つまり「それもそうだが」と言っている。「○○であ

るとしても……」というかたちで軽くふれたほうがよいだろう。

それから、忘れてはならないのが「鋭」⇩「鈍」、「動」⇩「静」の対比だ。

これも不可欠ではないが、漢文では非常に重視される「対」の関係であるし、今回は字数がそこまでタイトでないのでぜひ書きたい。

以上より、書くべきことを優先順に並べると

- ①「鈍を以て体と為し、静を以て用と為す」ことで長生きできる
- ② ①は長持ちする硯にならった生き方である

③「鋭」⇩「鈍」、「動」⇩「静」

④寿命は運命であり、生き方によってどうこうできはしない、という考え方もまた正しい。

さらに一点注意したいのが、「鋭」「鈍」「動」「静」の処理の仕方だ。「とがらず動かない生き方」では少し舌足らずな感じがするだろう。漢文では「硯のあり方」と「人の生き方」を形容する言葉は同じかもしれないが、現代日本語ではなかなかそうはいかない。したがって適切に言葉を言い換え、補う必要がある。「鈍」な生き方とは、「静」な生き方とは、ということこそそれぞれしく表現しよう。左のようなメモを片隅に書いておくとうい。

文房具

「体」⇩形

「鈍」⇩かどがなくずんぐりしている

「鋭」⇩とがっている

「用」⇩はたらき

「静」⇩いつも同じ場所にある

「動」⇩よく動く

人

「体」⇩心構え

「鈍」⇩おおらか

「鋭」⇩とげとげしく攻撃的

「用」⇩振る舞い

「静」⇩冷静に落ち着いて行動する

「動」⇩浮足立つ、あわてる

本文解説

第一部 筆・墨・硯の比較 (5行目「動者天乎。」)

書き下し

硯すずりと筆ひつぼく墨ぼくと、蓋けだしきる気類きるいするなり。出処しゅつしよ相近あひちかく、任用にんよう寵遇ちゆうぐ相近あひちかきなり。独りひと寿夭じゆえうのみ相近あひちかからざるなり。筆ふでの寿じゆは日ひを以て計かぞへ、墨すみの寿じゆは月つきを以て計かぞへ、硯すずりの寿じゆは世よを以て計かぞふ。其その故ゆゑは何なんぞや。其その体たいたるや、筆ふで最もも鋭えいく、墨すみ之これに次つぎ、硯すずり鈍にぶき者ものなり。豈あに鈍にぶき者もの寿じゆにして鋭えいき者もの天あなるに非あらずや。其その用ようたるや、筆ふで最もも動うごき、墨すみ之これに次つぎ、硯すずり静しずかなる者ものなり。豈あに静しずかなる者もの寿じゆにして動うごく者もの天あなるに非あらずや。

現代語訳

硯と筆・墨は、思うに文房具として同類である。使用状況も互いに似ており、使用方法も互いに似ている。ただ寿命の長短だけが互いに似てはいない。筆の寿命は日単位で数え、墨の寿命は月単位で数え、硯の寿命は世単位で数える。その(違いが生じる)理由はなんだろう。その形は、筆

が最も鋭く、墨は筆に次ぎ、硯はかどがなくずんぐりしている。なんとまあずんぐりしたものは長持ちし、鋭くどがつているものは短命なのだ。あ。そのはたらきは、筆が最も動き、墨は筆に次ぎ、硯はいつも同じ場所にある。なんとまあ、動かないものが長持ちし、よく動くものは短命なのだなあ。

第2部 硯のように生きる (5行目)「吾於是得養生焉。」

書き下し

吾^{われ}是^{こゝ}に於^おいて生^{せい}を養^{やしな}ふを得^えたり。鈍^{どん}を以^{もつ}て体^{たい}と為^なし、静^{せい}を以^{もつ}て用^{よう}と為^なさん。或^{ある}ひと曰^{いは}く、「寿^{じゆう}天^{てん}は数^{すう}なり。鈍^{どん}鋭^{えい}動^{どう}静^{せい}の制^{せい}する所^{ところ}に非^{あら}ず。借^た令^ひ筆^{ふで}鋭^{えい}からず動^{うご}かざるも、吾^{われ}其^その硯^{えん}と与^{とも}に久^{きう}遠^{えん}なる能^{あた}はざることを知^しるなり」と。然^{しか}りと雖^{いへど}も寧^{むし}ろ此^{これ}を為^なすとも彼^{かれ}を為^なすこと勿^{なか}れ。銘^{めい}に曰^{いは}く、「鋭^{えい}きこと能^{あた}はず、因^よりて鈍^{どん}を以^{もつ}て体^{たい}と為^なす。動^{うご}くと能^{あた}はず、因^よりて静^{せい}を以^{もつ}て用^{よう}と為^なす。惟^ただ其^それ然^{しか}り、是^{こゝ}を以^{もつ}て能^よく年^{とし}を永^{なが}らふ」と。

現代語訳

私はそこで健康を保つ方法がわかった。おおらかでどっしり構えることを心構えとし、冷静に落ち着くことを振る舞いとすのだ。ある人が言うことには、「命の長短は運命だ。鈍・鋭・動・静」といった、文房具の形やはたらき、人間の心構えや振る舞いによって決まるものではない。たとえ筆がどがつておらず動かなかつたとしても、硯とともにいつまでも長持ちすることとはできないと私は知っている」と。それはそうだけれど、どちらかといえば、おおらかで動じないほうがよくて、攻撃的で浮き足立つのはよくない。硯にこう銘を刻んだ。「鋭くはいられない、だから鈍重でいる。動くことはできない、だから静かである。ただそれだけのことだが、それによって長生

きできるのだ」と。

要旨

硯はとがらず静かであるために筆や墨に比べて寿命が長い。寿命は運命であるとしても、硯にならって、攻撃的にならずおおらかな心をもち、物事に動じず冷静に落ち着いて行動するほうがよい。(88字)

(津田智沙、小林美桜、松野貴大)